

令和六年度
入学試験
神奈川県立平塚看護高等学校
問題用紙 国語

注意事項

- * 指示があるまでは中を見てはいけません。
- * 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- * 問題用紙と解答用紙それぞれに受験番号、氏名を記入してください。

受験番号
氏 名

— 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

描く、語るということとことば——客観的に描く、語るということ

同じものを見ていても、見ているところが違う、(1)、^①見たものを伝えるときに異なるとして伝えられるというのは、絵を描く、写真を撮るなどの行為で明らかであると思う。出来事をことばで描くという行為も同じである。また、描く、語るという行為では、語る人がどんな人間であるのか、また、聞いて、読んで、見てくれる人がだれなのかということが大変重要になってくる。

私は人類学者としてインタビュー調査をすることがよくあるが、あるときアメリカで生まれ育った日系二世の父親を持つ「継承語話者」にインタビューする機会があつた。その際、話の流れで、日本料理の作り方を知っているかという質問をすることになった。その際、彼女は、それはだれがその質問を自分にするかによつて、(2)、日本人の問いかけなのか、日本のことを知らない人の問いかけなのかによつて答え方は異なると答えたのである。その時に私ははつとした。例えば、私が日本語学習者に日本語でインタビューをする場合、私(=インタビューする人)は、インタビューを受ける学習者にとつて、研究者であり、教師であり、日本語母語話者である。(3)、他の人が同じ問いを学習者にした場合、学習者から同じ回答が返ってくるだろうか。私がしているインタビュー、人に問いかけるといふ行為とはいったいどんな行為なのだろうか。

九八〇年代に人類学において「文化を描く」ことが批判的に振り返られたが、これはその問題とまさに同じ問題である (Marcus and Fischer 1986)。人類学者・調査者は他者を見るだけでなく、他者に見られてもおり、そ

の関係性の中に自分自身が位置付けられていく。(4)、それをしつかりと踏まえた上でフィールドにおける「自分」に意識的になり、調査協力者との関係性の中に自分を位置付け、記述を行うことが大切である。これは人類学者が研究を行う際の「中立な」^②「客観的な」立場を^③否定するものである。

このような現在の人類学のスタンスは、人類学者が文化を描くという文脈だけでなく、人がコミュニケーションをする際にも同じことが当てはまる。(5)、人がコミュニケーションを行う際には、さまざまな関係性の中で自分の立ち位置(ポジション)をどう設定し、どうコミュニケーションしていくかを考えていかなければならない。自分の立ち位置に満足がいけない場合は、違う立ち位置に立てるように相手と交渉し、自分の立ち位置を探しながら、コミュニケーションを行っていかなければならないのである。このような位置取り(ポジショニング)の過程は実際のコミュニケーションの際に無視できないものであると考えるが、ことばの教育は^④このような緊張感のあるコミュニケーションを取り込んでいると言えるのだろうか。

(佐藤慎司・佐伯胖『かわるかわることば 参加し対話する教育・研究へのいざない』東京大学出版会、二〇一七年より)

問一 傍線①「見たものを伝えるときに異なって伝えられる」のはなぜか。その理由を解答欄に当てはまるかたちで文中より抜き出し、その最初と最後の五字をそれぞれ答えなさい。

問二 傍線②「客観的」、傍線③「否定」、それぞれの対義語を答えなさい。

問三 傍線④「このような緊張感のあるコミュニケーション」とあるが、その状況を具体的に示した箇所を解答欄に当てはまるかたちで文中より抜き出し、その最初と最後の五字をそれぞれ答えなさい。

問四 (1) から (5) に入ることを以下の選択肢より選び、記号で答えなさい。

ア 例えば イ もし ウ そして エ つまり オ あるいは

二 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

徳は大きく「倫理的徳」と「知的徳」に分けられる。まずは前者から見ていこう。倫理的徳は、その名のとおり、倫理的な実践（倫理的な判断や行為）に関わる徳である。具体的には、正義、勇気、節制、慈愛など、さまざまなものがある。私たちは日々、なされた行為について、それを善いとか、悪いとか判断している。また、善いことをして、悪いことをしないようにしている。このような倫理的な判断や行為において中心的な役割を果たすのが倫理的徳である。

たとえば、正義の徳は、ある行為が不正でないかどうか、公平性を欠いていないかどうかを正しく判断することを可能にする。加えて、公正で公平な行為を実行し、そうでない行為を抑制することも可能にする。正義の徳を備えた人は、まさにその徳によって、このような倫理的な判断や行為を正しく行うことができるのである。

倫理的徳を倫理実践の中心に、^aス^uえて倫理を理解しようとする立場を「徳倫理学」とよぶ。徳倫理学では、倫

理的に善い行為とは、倫理的徳にもとづいて行われる行為のことである。徳がなければ、善い行為もありえない。したがって、たまたま公正なことを行っても、それが（１）の徳によるものでなければ、善い行為にはならない。困っている人をたまたま助けても、（２）の徳にもとづいて助けるのでなければ、善い行為にはならないのである。逆に、たまたま不正をしても、倫理的な徳をもつ人がたまたま何らかの事情でそうしたのであれば、悪い行為にはならない。

このように、徳倫理学では、行為の倫理的な善悪は倫理的な徳によって決まる。これが徳倫理学の大きな特徴のひとつである。たまたま公正なことや不正なことをしても、善い行為や悪い行為にはならない。この点にかなりイワカンイワカンを覚える人もいるだろう。じつさい、倫理学の別の立場では、行為の善悪をそのようには捉えない。

倫理学には、徳倫理学のほかに、義務論と功利主義というふたつの主要な立場がある。義務論は、行為が人間としての義務（誠実であることや人を傷つけないことなど、人間としてなすべきこと）にもとづいているかどうかで、行為の善悪が決まるとする。一方、功利主義は、行為の結果が善いかどうかで、行為の善悪が決まるとする。このように、倫理的な立場によつて、行為の善悪の捉え方はかなり異なる。それでも、私たちの日常の感覚から言つて、倫理的な徳が私たちの倫理的な実践において重要な役割を果たしていることは間違いないだろう。

つぎに「知的徳」を見ていこう。倫理的徳が倫理実践に関わる徳であるのにたいして、知的徳は知識の獲得に関わる徳である。私たち人間の活動はそのほとんどが知識にもとづいて行われると言つてよいくらい、知識が重要な役割を果たしている。図書館に行くにも、ふつう図書館がどこにあるかを知っていなければならぬし、自転車に乗るにも、自転車の乗り方を知っていなければならぬ。このような知識の獲得を可能にするのが、知的徳（知的にタクエタクエツツした性格）である。知的徳を備えた人は、その徳によつて、さまざまな知識を獲得することができる。

知的徳も、具体的には、開かれた心、知的勇氣、好奇心、粘り強さなど、たくさんある。たとえば、開かれた心は、自分と反対の人の意見にもよく耳を傾け、自分の考えが本当に正しいのかどうかを、タカク的に検討するような性格のことであり、それによって正しい考え（すなわち知識）に至ることが可能になる。このような開かれた心をもたなければ、他者の考えを無視して、自分だけの、ドクゼンのな考えに陥りやすくなる。

また、粘り強さも重要である。それはどんな困難にも負けずに、シンボウ強く探究を続けていく知的徳である。科学では、何度も実験に失敗して、ようやく成功に至ることが多い。度重なる失敗にもくじけずに、何十回、何百回と実験を続けていくには、粘り強さが、フカケツである。科学的な知識は粘り強さという知的徳の賜物たまものと言える。

このように、徳には、倫理的な実践に関わる倫理的徳と、知識の獲得に関わる知的徳がある。

（信原幸弘『覚える』と「わかる」 知の仕組みとその可能性』筑摩書房、二〇二二年より）

問一 波線 a ~ g のカタカナを漢字に直しなさい。

問二 (1) と (2) に当てはまることばをそれぞれ文中より抜き出して答えなさい。

問三 「倫理的徳」、「知的徳」とはそれぞれどのような徳か。文中より一〇字で抜き出して答えなさい。

問四 「倫理的徳」、「知的徳」のそれぞれを具体的に示したものを全て、文中より抜き出して答えなさい。

問五 「徳倫理学」、「義務論」、「功利主義」それぞれの立場における「行為の善悪の捉え方」を文中より抜き出して答えなさい。

三 次の文章の要旨を五〇〇字以内でまとめなさい。(句読点を含む)

(社説) ノーベル賞 コロナ禍から命救った

コロナ禍に苦しむ世界で、この人たちの研究がどれほど多くの人の命を救い、生活や仕事に役立ったことだろう。今年のノーベル生理学・医学賞がm(メッセンジャー)RNAワクチンの実用化につながる新技術を開発した独ビオンテック社のカタリン・カリコ氏、米ペンシルベニア大学のドリユー・ワイスマン氏に贈られることになった。2人は、人工のmRNAを体が「敵」と見なしておこす過剰な免疫反応を回避する仕組みを開発し、実用化に結びつけた。ワクチン開発は早くても数年かかるとされるが、世界的大流行となつてから1年足らずで接種が始まったのも、この技術のたまものだ。

日本では、ファイザー社やモデルナ社のmRNAワクチンが接種され、私たちも直接の恩恵を受けた。ノーベルが遺言で授与対象とした「人類に最大の貢献をもたらした人々」にふさわしい業績だ。

ハンガリー生まれのカリコ氏は博士号を取得後、職を得て米国に渡航した。思うような成果が出ず、研究環境や

資金にも恵まれず、将来に暗雲がさしかかった。大学の共用コピー機の前で、ワイスマン氏との偶然の出会いで意気投合、共同で研究を始めた。当初は注目されず、研究資金にも苦労したが、あきらめなかった。

2人の歩みから、研究者の多様性や交流の大切さ、大きな変革をもたらす研究の萌芽（ほうが）を探し出し、育てる難しさを痛感させられる。

研究は、視点が異なる人々の交流で新しいアイデアが生まれ育ち、成果の公表と相互検証で健全に進歩していく。どんな基礎的な研究が将来、飛躍的な発展につながるかを見通すことは困難だ。

ひとつの国だけの人材や施設では発展に限界がある。交流の重要度が増し、頭脳循環の流れが進み、人材獲得競争は激化している。

いまの日本は、留学生の交流、研究者の中長期的な派遣も停滞、国際共著論文数も伸び悩み、世界から取り残されかねない。多様性の欠如は、女性研究者の少なさにも表れている。その比率は2割に満たず、主要国で最低だ。

基礎研究と産業につながる応用研究のうち、日本は後者が重視される。基礎軽視は、未来をひらく飛躍の芽を摘みかねず、ノーベル賞受賞者たちも苦言を呈し続けてきた。

画期的な成果につながる可能性を持ちながらも、ポストや資金を得られなかった無数の「カリコ氏」もいることだろう。多くの実を結んでもらうには、基礎研究への裾野の広い支援が欠かせない。

『朝日新聞 DIGITAL』二〇二三年十月二〇日「社説」より

朝日新聞社に無断で転載することを禁じる 承諾番号 2410252